「互いに愛し合う」

Ⅰテサロニケ 4:9-12

2021.9.12 南与力町教会朝拝

序. 神に喜ばれる歩み

朝の礼拝ではテサロニケの信徒への手紙第一から御言葉に聞いています。4 章 1 節～12 節の段落には新共同訳聖書で「神に喜ばれる生活」と小見出しが付いています。4 章 1 節では次のように記されていました。

「さて、兄弟たち、主イエスに結ばれた者としてわたしたちは更に願い、また勧めます。あなたがたは、神に喜ばれるためにどのように歩むべきかを、わたしたちから学びました。そして、現にそのように歩んでいますが、どうか、その歩みを今後も更に続けてください。」

では「神に喜ばれる歩み」とはどういうものなのか。そのことについて、前回学びました 4 章 3 節～8 節までのところでは、特に私たちが「聖なる者となる」ということについて教えられていました。具体的に言うならば、「みだらな行い」、性的な不品行を避け、汚れた生き方ではなく、聖なる生活をしていくことです。それが神の御心であり、神に喜ばれる歩みであると教えられてきたわけです。

そしてそれに続く今日の個所においても、パウロは「神に喜ばれる歩み」とはどういうものかについて別の観点から語っています。

１．兄弟愛について（4:9-10）

4 章 9 節

「兄弟愛については、あなたがたに書く必要はありません。あなたがた自身、互いに愛し合うように、神から教えられているからです。」

「兄弟愛について」これが、パウロがこの個所で取り上げている主題です。「兄弟愛」とはギリシャ語で「フィラデルフィア」という言葉です。これは現在アメリカの都市の名前にもなっていますが、古代ギリシャ語においてこの「フィラデルフィア」（兄弟愛）言う言葉は、文字通り同じ親を持つ兄弟姉妹の間での愛、肉親の兄弟姉妹を愛することを意味しました。しかし、新約聖書においてはこの言葉が、肉親の兄弟姉妹ではなく、主にある兄弟姉妹、信仰の兄弟姉妹に対する愛を表すものとして用いられるようになりました。パウロはこの手紙の中で、何度も「兄弟たち」と教会の人々に呼びかけています。主イエス・キリストを信じ、主に結ばれた者たちは、血はつながっていなくとも「神の家族」であり（エフェソ 2:19)、イエス・キリストを長子（長男）とする兄弟姉妹なのです(ローマ 8:29)。それゆえお互いを兄弟姉妹として、家族の一員として愛し合う。それが教会のあるべき姿です。

・神から教えられている互いへの愛

そしてパウロは 9 節で「兄弟愛については、あなたがたに書く必要はありません」とテサロニケ教会に対して語っています。その理由として「あなたがた自身、互いに愛し合うように、神から教えられて

いるからです」と言われています。パウロが、「兄弟愛」について改めて書く必要がないのは、テサロニケ教会の人々自身が、互いに愛し合うよう神から教えられているからなのです。この「神から教えられている」という言葉は、ギリシャ語で一つの単語でして、新約聖書の中でここにしか使われていない珍しい言葉です。パウロが造った造語ではないかとも言われています。では「神から教えられている」とは、どういう意味で言われているでしょうか。

先ほど読んでいただいたレビ記 19 章 18 節にあるように「隣人を自分のように愛しなさい」とは旧約聖書において既に神によって教えられていたことでした。主イエスも神を愛することと隣人を愛することが律法の中で最も大切な戒めであると教えられました（マタイ 22:34-40)。そしてパウロもおそらくテサロニケにいたとき、彼らに「互いに愛し合うように」と教えただろうと思います。しかもパウロは 4 章 2 節にあるように「主イエスによって」、主イエスを通して人々に教え、命じました。特にこの「互いに愛し合いなさい」という教えは主イエスご自身が教えられたものです。ヨハネによる福音書 13 章 34 節～35 節。

「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる。」

テサロニケ教会の人々はパウロを通して、このような主イエスの教えを聞いたでしょう。そして彼らはそれを単なる人間の言葉としてではなく、神の言葉として受け入れたのでした。そのことについて、この手紙の 2 章 13 節で次のように言われていました。

「このようなわけで、わたしたちは絶えず神に感謝しています。なぜなら、わたしたちから神の言葉を聞いたとき、あなたがたは、それを人の言葉としてではなく、神の言葉として受け入れたからです。事実、それは神の言葉であり、また、信じているあなたがたの中に現に働いているものです。」

パウロたちから聞いた言葉を、テサロニケ教会の人々は事実そうであるように「神の言葉」として受け入れました。そしてその「神の言葉」は「信じているあなたがたの中に現に働いているもの」なのです。それゆえ、テサロニケ教会の人々は「互いに愛し合いなさい」ということを、神の言葉によって「神から教えられている」とパウロは語っているわけです。

さらにこの「神から教えられている」という言葉は、今日の個所の直前 4 章 8 節の「御自分の聖霊をあなたがたの内に与えてくださる神」とも関係づけて理解することができます。教会の人々はただ「神の言葉」を与えられただけではなく、神様から「聖霊」を心の中に与えられたのです。その聖霊によって、「互いに愛し合うよう」神ご自身から教えられている。そのような意味がここには込められているのでしょう。聖霊によって神の愛が私たちの心に注がれています（ローマ 5:5)。私たちはその愛をもって互いに愛し合うように、神様ご自身から教えられているのです（Ｉヨハネ 4:11 参照)。

・兄弟姉妹への愛の実行

そして 4 章 10 節では

「現にあなたがたは、マケドニア州全土に住むすべての兄弟に、それを実行しています」と言われています。テサロニケ教会の人々は、「互いに愛し合いなさい」と神から教えられているだけではなく、実際、それを実行していました。お互いを愛し、また自分の教会内にとどまらず、「マケドニア州全土に住むすべての兄弟（姉妹)」に愛を行っていたのです。「マケドニア州」とは今のギリシャの北部に当たりますが、この地域にテサロニケ教会があり、さらにはフィリピの教会、ベレアの教会がありました。また新約聖書には記されていませんが、他にも小さな教会がこの地域にできていた可能性も考えられます。テサロニケ教会の人々はそのようなマケドニア州全土にいる兄弟姉妹すべてに対して愛を行っていたのです。具体的にどういうことをしていたのでしょうか。おそらくこの地域で人の行き来がかなりあったと思われます（1:8 参照)。他の教会からやってきた人々、旅人を兄弟姉妹としてもてなすこともあったでしょう（ヘブル 13:1-2 参照)。また経済的に貧しい教会に献金をし、援助することもあったかもしれません（II コリント 8:1-4 参照)。いずれにしても、マケドニアという地域にある教会の兄弟姉妹すべてに対して愛を示し、実行していたのです。

・さらに豊かになるように

しかしパウロはそれで十分だと言うのではなく、10 節の後半で「しかし、兄弟たち、なおいっそう励むように勧めます」と言っています。「なおいっそう励むように」と訳されている言葉は、「さらに豊かになるように、もっと豊かに満ち溢れるように」という意味の言葉です。4 章 2 節で「どうか、その歩みを今後も更に続けてください」と訳されていたのと同じ言葉です。テサロニケ教会の人々は実際、主にある兄弟姉妹への愛を実行しているけれども、そこにとどまり満足するのではなく、その愛においてさらに豊かに満ち溢れるものとなるように。このことをパウロは勧め、励ましているのです。

私たちの教会においても基本的にはお互いへの愛をもって、兄弟姉妹を愛して歩んでいるのではないかと思います。しかしそこにはやはり欠け、足りないところもあるでしょう。私たちが兄弟姉妹への愛においてさらに豊かになっていくことができるよう祈りつつ歩んでゆきましょう。それが神様に喜ばれる歩みにつながるからです。

２．自分の手で働くように（4:11-12）

そしてパウロの勧めは 4 章 11 節で次のように続いていきます。

「そして、わたしたちが命じておいたように、落ち着いた生活をし、自分の仕事に励み、自分の手で働くように努めなさい。」

この 11 節からは、ここまで語られてきた「兄弟愛」とは関係のない別の事柄が教えられていると感じるかもしれません。しかし原文を見ますと、すぐ前の 10 節と 11 節は一つの文として密接につながっていることがわかります。10 節の「勧めます」という言葉は、11 節の「落ち着いた生活をし、自分の仕事に励み、自分の手で働くように努めなさい」という言葉にもかかっているのです。それゆえ、私たちはこの 11 節、12 節も「兄弟愛」と関係のある事柄として教えられ、勧められているのだと理解する必要があります。

11 節で勧められていることは、「落ち着いた生活をし、自分の仕事に励み、自分の手で働くように努めなさい」ということです。なぜパウロはこのような勧めをここでしているのでしょうか。同じテサロニケ教会に宛てて書かれたテサロニケの信徒への手紙第二 3 章 10 節～12 節（新 p. 382）には次のように記されています。

「実際、あなたがたのもとにいたとき、わたしたちは、「働きたくない者は、食べてはならない」と命じていました。ところが、聞くところによると、あなたがたの中には怠惰な生活をし、少しも働かず、余計なことをしている者がいるということです。そのような者たちに、わたしたちは主イエス・キリストに結ばれた者として命じ、勧めます。自分で得たパンを食べるように、落ち着いて仕事をしなさい。」

ここから分かるように、テサロニケ教会の中には「怠惰な生活をし、少しも働かず、余計なこと（余計なおせっかいばかり）している者」がいたようです。第一テサロニケの 5 章 14 節でも「怠けている者たちを戒めなさい」とありますから、この第一の手紙が書かれた時すでに、テサロニケ教会には自分の仕事を放棄し、怠けて生活している人々がいたようです。

なぜそのような人々が出てきたのでしょうか。よく指摘されることは、テサロニケ教会の信者たちが持っていた切迫した再臨信仰と関係があったのではないか、ということです。この手紙にもたびたび主イエス・キリストが再び来られるということが語られています。それ自体は私たちの信仰にとって大切で不可欠なものです。しかし、主イエスの再臨が間近に迫っているとあまりにも熱狂的に考えるあまり、自分の仕事をやめてしまう人がいたのではないか、と想像できます。「もうすぐ主イエスは来られ、世の終わりが来るのだから、仕事なんてしてたってしょうがない」と考え、自分の仕事を放棄してしまった人がいたのではないでしょうか。

そしてそのような人が仕事をやめてしまったもう一つの理由として「兄弟愛」があったと思われます。それはその人が「兄弟を愛する」ために仕事をやめたというのではなく、逆に、他の兄弟姉妹の愛を当てにして、自分は仕事をせず、怠惰な生活をするようになったということです。言わば兄弟姉妹の愛に甘えて、自分は仕事をせず、その人たちのお世話になって生活する。そんな人々がどうやら教会の中にいたようなのです。

ですからパウロはここで「兄弟愛」についての勧めに続いて、「落ち着いた生活をし、自分の仕事に励み、自分の手で働くように努めなさい」と勧め、戒めているのです。再臨信仰のゆえに過度に熱狂主義的になり、浮足立った生活をするのではなく、「落ち着いた生活」をするように。自分の仕事を放棄し、兄弟姉妹の愛に甘え、お世話してもらうのではなく、自分自身のやるべきことをなし、自分の手で働くように。そのように熱心に努めるように。パウロはそのことをここで勧めているのです。

そして続く 12 節では「そうすれば、外部の人々に対して品位をもって歩み、だれにも迷惑をかけないで済むでしょう」と言われています。「外部の人々」とは教会の外部の人々、キリスト者ではない人々を指しています。そして「品位をもって」と訳されている言葉はもともと「良い姿で」という意味があります。なぜ「落ち着いた生活をし、自分の仕事に励み、自分の手で働くように努め」なければならないかと言えば、それは第一に、教会の外部の人々に対して「良い姿で」、「品位をもって」歩むため、なのです。もしキリスト者が自分の仕事もしないで、「もうすぐ世の終わりが来る」と騒いでばかりいたらどうでしょうか。それを見た外部の人々は決して良く思わないでしょう。むしろそれは教会の

評判、キリスト教の評判を落とすことになります。そうならないように、私たちキリスト者は、この世において、「落ち着いた生活をし、自分の仕事に励み、自分の手で働き」、そうして外部の人々に対して「良い姿で」歩んでいく必要があるのです。それが外部の人々への良い証しとなり、結果としてキリスト教会への信頼を高め、伝道にもつながっていくでしょう。その意味で、キリスト者が落ち着いた生活をし、忠実に自分のなすべきことをし、自分の手で働くことは大切なことなのです。

さらにもう一つのこととして「だれにも迷惑をかけないで済むでしょう」と言われています。この言葉は原文を直訳すると「(あなた方が) 誰をも必要としないため」となります。自分でちゃんと働いて生活費を稼ぐなら、誰かに、特に兄弟姉妹に負担をかけることはなくなります。兄弟姉妹に負担をかけないようにする。それは兄弟姉妹を愛することにつながります。兄弟姉妹が示してくれる愛に甘えて、自分は怠けて仕事もせず過ごすのではなく、自分でちゃんと働いて日々の糧を稼ぐ。そのことによって兄弟姉妹に負担や重荷をかけずに済むのです。

もちろん、現実には働きたくても病気や健康の問題など、様々な事情で働けない人がいます。パウロはそういう人にまで「自分で働くように」無理強いしているのではありません。この手紙の 5 章 14 節で「弱い者たちを助けなさい」と勧められているように、弱さのゆえに働けない人々のことを、愛をもって助けることは必要です。しかし働くことができるのに、怠けて働かず、人に甘えてばかりいる人には、やはり「自分の手で働くよう努めない」と勧める必要があったのです。

結論：

私たちは今日のところで勧められているように、お互いへの愛、主にある兄弟姉妹への愛を、さらに豊かに実行していくことができるよう祈りつつ歩みましょう。そして、この世においては、落ち着いた生活をし、自分のすべきことをなし、可能であれば、自らの手で働いていきましょう。そうすることで外部の人々に対してよい姿で歩み、また他の人に負担をかけずに済むからです。そのような私たちの歩みを神様は喜んでくださいます。